

阿賀野川の急流下り

バードのお父さんは、牧師だ。日曜日のミサが大事な仕事。それに続く日曜学校で子供たちに聖書の話をかかせてあげるのが仕事だった。

楽しみは、その日の夕食。お母さんが半日ばかりで作ったローストビーフは天下一品だ。

日曜日のお肉はサンデーローストと呼ばれ、普通の家庭でもよく食べるごちそう。

バードはローストビーフを焼くときに出る肉汁で作ったグレイビーソースに、ヨークシャープディングをつけて食べるのが好きだった。

よく勘違いする人がいるけど、プディングはプリンとは別物、パンの一種なんだ。パンに肉汁は、とても相性がよい。

「おまえはたちは、ヨークシャー生まれ。だからこんなにヨークシャープディングが好きなんだね」

おかあさんは、よく言ったものだ。

「きょうはね、スコットランドからおいしいものが届いているの。それで、ケーキを作ってみたの」

「え、何？」

おかあさんは、オーブンから焼けたばかりのコロッケのようなものを取り出した。

「これよ、スコットランド産のスモークサーモンをパン粉で焼いてみたの。そこに少し醒めたのがあるから、味見してご覧」

「へえー！そんなにおいしいの？フォークどこだったっけ？」

バードがフォークを探して、サーモンケーキから眼を離しているすきに、小さな手が皿を奪った。



「おねえちゃんだけずるい！」

妹のヘンリエッタだった。右手にはちやつかりフォークをもっている。ヘンリエッタは皿を奪うと、キッチンの隣の居間に逃げ込んで、ドアをしめた。開けようとしてもドアは開かない。ヘンリエッタが鍵をかけたのだ。ドンドン！とドアをノックするバード。

「こら、開けなさい。なんであなたが先に食べるのよ。わたしにもちようだ
ら」

「これとってもおいしいわよ、お姉ちゃん」

ドンドンドン！

「そんなにおいしいの、ヘンリエッタ」

ドンドンドン！

「起きて下さい、バードさん。船が出ますよ」

ふすまを叩きながら、聞こえて来る大声はイトーの声だ。

「うーん。あら、やだサーモンケーキを夢をみたてわ。ゆうべこの宿で出して
くれた鮭の切り身が本当においしかったからかも」

「イトー、どうしたの？あさ∞時出航だったんじゃないの？まだ、お日様もの
ぼってない時間じゃないの？」

ふすまを開けたイトーがあわただしく言った。

「とにかく急いでください。もう船には乗客が全員そろっていて、僕たちを待
っているんです。出航が早まりました」



バードが泊っていたのは、津川という阿賀野川の港だった。津川は、会津の西の玄関口。

ここから船で、新潟まで人や物を届ける船が往来している。宿屋の主人は、バードの荷物を背負って、川岸まで送ってくれた。あたりには、ゆうべのうちに荷物をはこんできた馬が、群がっていて少し騒がしい。

船には客が二十五人が乗っていた。船と前と真ん中に米俵と、木枠に入った陶器が積んである。

乗客と貨物を一緒に運ぶやりかただった。船頭は貳人。船尾にいるひとりは、

「ホーラエンヤー！」と奇声をあげながら、ともがいとよばれる大きな櫓で船をこぎ始めた。もう一人は、前のほうで平たい幅のひろい櫓で船をこぎ出している。

岸から離れ、川の真ん中に出ると、船は流れに乗ってすると滑りだした。米俵の上に簡易イスをのせて座ったバードの額を涼しい風が通り過ぎていく。

「気持ちいいわねー、イトー」

「そうですね、昨日まで馬や歩きの旅だったですから、こんなに速くは進めませんでしたからね」



船は、大きな山に向かって進み、その間をすいすいと走っていく。「阿賀野川の急流下り」といわれるこの船旅は、景色がどんどんと変わっていく。青々と茂った草木の間から、いきなり大きな赤い岩があらわれたかと思うと、茅葺屋根の並んだ小さな村が出てきたりする。高台に立った、お寺の塔。近くの山々の間から、白い雪をいただいた山脈が遠く姿をのぞかせている。

「この川は、お城のないライン川みたい」

「あれは糸井山（飯豊山）かしら」

「新潟についたら、妹のヘンリエッタの手紙がついているはず。楽しみ、楽しみ」

バードの頭にはいろんな思いが浮かんでは消えていった。

森はますます深くなり、バードも人々もますます夢心地になっている。やがて、森は消え、川は広く開けた。景色はすっかり平野となり、屋根に石を乗せた家がたちならんでいる。縁側を川に突き出している料亭では、芸者をあげた男衆が、昼だというのにどんちゃん騒ぎをしている。

旅の途中で、乗客やどんどん下りていき、午後〇時ごろ、新潟に着いた時にはバード達をあわせて五人となっていた。〰人をおろした船頭に頼んで、船を運河に進めてもらった。船は運河に浮かぶ何百もの船をかくぐって、町のど真ん中に上陸した。

何度も道を尋ねたあげく、二人はようやく協会伝道本部（ミッションチャーチ）にたどり着いた。出迎えてくれたのはファイソン夫妻と三歳になった金髪娘のルースちゃん。小さな建物だったが、西洋式の家で、ドアや壁はしっかりとできていいる。

いつまでもがやがやとうるさくて、無作法な旅館をめぐり歩いてきたバードにとって、この家は心地よい限りだった。